

岐阜公園三重塔

岐阜市の中央、金華山山麓にそびえる「岐阜公園三重塔」は、木々の緑の中に朱色がひととき鮮やかに映え、岐阜公園のランドマークとして、市民に親しまれてきました。

しかし、建立から約100年が経過し、老朽化が著しく、至るところが損傷していたことから、後世に末永く継承するため、平成26年9月から平成29年2月末までの約2年半をかけて、大規模な修復を行い、建立当初の姿を復原しました。

以下、三重塔及び修復整備工事の概要です。

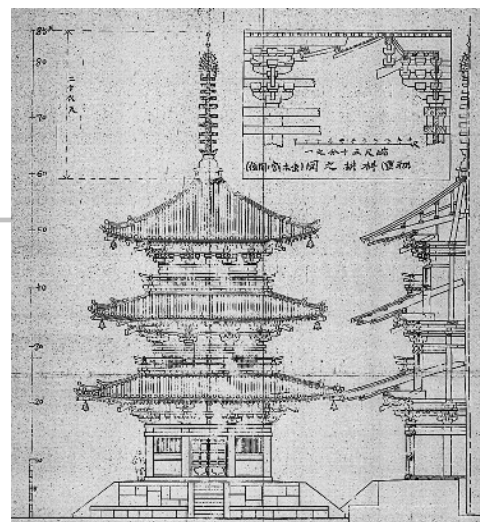
三重塔の概要

岐阜公園三重塔は、大正6年(1917)11月21日に大正天皇の即位を祝う御大典記念事業として、岐阜市が市民の寄付を募った上で、建立されました。

塔の考案は、日本建築史学の創始者といわれ、明治神宮や築地本願寺などを設計し、建築界で初めて文化勲章を受章した伊東忠太氏です。

場所の選定は、岐阜市にゆかりのある日本画家の川合玉堂氏が行ったといわれています。

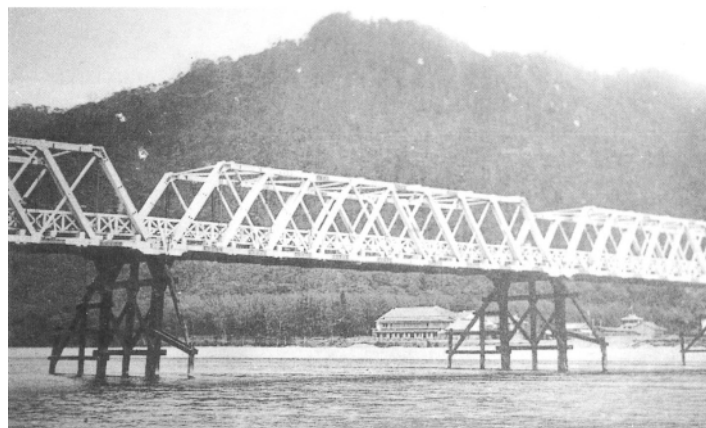
- ・構造形式 木造、三間三重塔婆、瓦葺き
- ・総高 22.168m
- ・柱間 三間四方(各層)
初重5.454m、二重4.363m、三重3.636m
- ・構法 檜構法、懸垂式心柱



伊東忠太考案図

岐阜市の中心部を流れる長良川には、いくつかの橋が架けられています。そのうち、最も古くからある長良橋は、大正4年に木製のトラス橋から鉄橋に架け替えられました。

本三重塔には、木橋であった時の長良橋の古材が使用されていたことが、解体調査で確認できました。塔の内部では、こちらを実際にご確認いただけます。



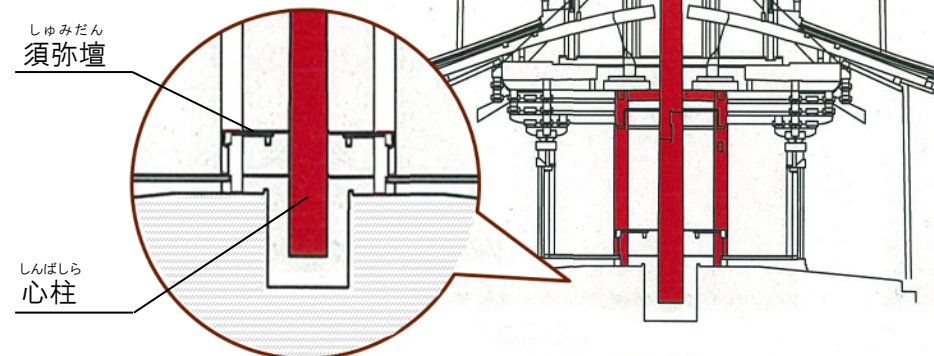
明治34年から大正4年まで長良橋に架かっていた木製トラス橋

特徴①

特徴②

三重塔には、中央の心柱が鎖で吊され地面から浮いている懸垂式工法が採用されています。

江戸時代後期から明治期にみられるもので、現存する文化財指定の三重塔では、本塔のみが採用する特徴的な構法と考えられています。



塔内でご覧いただくことができます！

解体せずに残した範囲
(心柱の一部、初重四天柱:赤色)



完成当時の三重塔(時期不明)



修復前の三重塔(平成26年)



修復を終えた三重塔(平成29年)

豆知識



正面扉の上部についている“扁額”。表面が風化し、文字が読めなくなっていました。わずかな凹凸を摺りだし、当初のとおりに復原しました。

- ・書 「忍鑑」
- ・揮毫者 高野山本海

忍辱(心を和らげて耐え忍ぶ)の意で、弘法大師の「大日経開題」の一文から引用されたものと推測する。
大正6年に三重塔の竣工に合わせて、高野山から贈られた弘法大師像と共に、寄贈されたと考えられる。

◆お問い合わせ◆

岐阜市 都市建設部 歴史まちづくり課
〒500-8701 岐阜市司町40番地1
TEL 058-214-4596
FAX 058-262-0512

工事概要

本修復整備工事では、塔中央の心柱の一部と、初重と呼ばれる一層部分の四天柱を残して、大部分を解体し、塔の景観を損ねていた軒の垂下を支えるための軒支柱を撤去しました。
また、木材の腐朽箇所、破損部等を補修、脆弱な構造部分への補強を施した上、再度組み立てを行いました。

(1) 仮設設置・解体調査

信長公居館跡の遺構を保護し、仮設ヤードを設置しました

部材一つ一つを丁寧に調査しながら解体を行いました

解体完了

寸法・損傷調査

番付取り付け

足場組立

仮設盛土工事

解体状況

(2) 補修、補強

既存部材を極力再利用しましたが、再利用できない部材は、新しく取り替えました

くりん九輪木下地の復原

鬼瓦の復原

覆鉢の修復

塔の中心部 心柱と桔木

柱の修復

巴瓦の復原

くりん九輪

そうりん相輪

おにがわら鬼瓦

どいげた土井桁

さぎちようばしら左義長柱

ともえがわら巴瓦

はねぎ桔木

がわばしら側柱

してんばしら四天柱

(3) 組立て

補修して再利用されている部材と新しい補強部材が混合しています

桔木と呼ばれる松の丸太で深い軒の出を支えます

組み立て完成

初重组立

二重组立

三重组立

二重母屋、垂木取付

野地板、屋根瓦張り